

## 第3部

### 調査結果からみた 「最近の青少年の姿」について

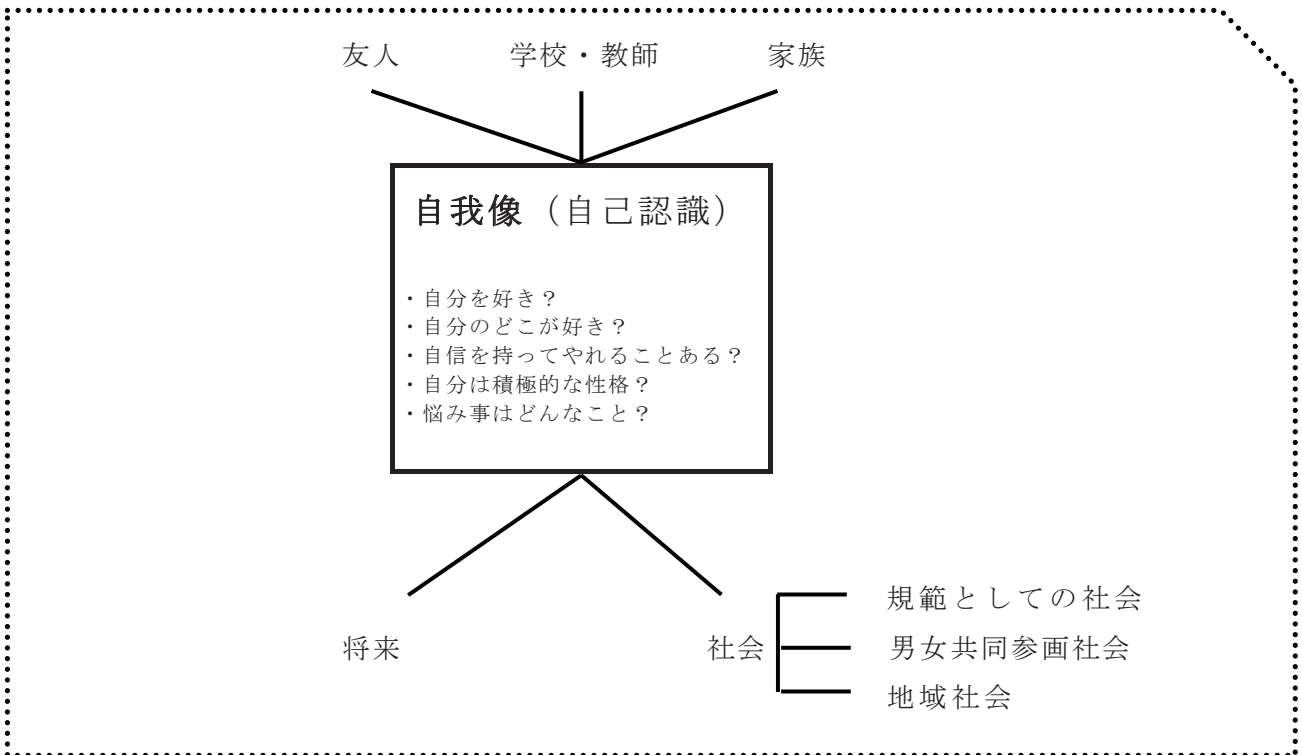


# 調査結果から見た「最近の青少年の姿」について

弘前大学名誉教授 教育学博士 佐藤 三三さとう さんぞう

## はじめに

本稿にあつては、以下のような関連図をイメージしながら、主として、調査時点でとらえられた青森県の青少年の自我像を記述・分析することにしたと思う。



## I 自我像 (自己認識)

「自分のことが、好きか?嫌いかな?」という単純な質問から見ていくことにしよう。このことがなぜ問題かといえば、自分を好き (自己肯定的) であればあるほど、生きること全般に対して積極的である傾向がみられるからである。

表1にみるように、ここ数年の自己肯定的児童・生徒の動向は、小学生にあつては「減少」、中学生は「増加」、高校生は「現状維持」、と読むことができる。しかしながら、表2以下の諸関連の項目の分析とも併せて概括するならば、「自己肯定的」な児童・生徒が少ない、あるいは「自己否定的」な児童・生徒が多い、とっていいであろう。

<表1 自分が「好き」+「どちらといえば好き」の合計>

校種別	性別	H10年		H20年		H22年		H24年	
小学校	男子	81%	86	75%	79	73%	75	69%	
	女子		63		66		62		
中学校	男子	65%	62	51%	63	54%	69	61%	
	女子		39		45		53		
高校	男子	56%	50	46%	54	51%	56	51%	
	女子		42		48		46		

\*平成10年度は男女別なし。

表2は、自分の「性格」「外見」「学校での成績」、そして他者としての「友達」「家族」「先生」について、「満足しているか否か」を尋ねたものであり、表3は、さらに踏み込んで自分の性格の特徴を自己評価してもらった結果である。

<表2 自分の「性格・外見・成績」「友達・家族・先生」に関する満足度>

(「とても満足している」+「どちらかといえば満足している」の合計)

校種別	性別	自分のこと			他者のこと		
		性格	外見	成績	友達	家族	先生
小学生	男子	64%	52%	57%	88%	92%	73%
	女子	55%	39%	50%	81%	88%	75%
中学生	男子	67%	47%	30%	83%	85%	79%
	女子	49%	30%	24%	76%	83%	77%
高校生	男子	49%	29%	30%	82%	85%	65%
	女子	32%	18%	30%	75%	82%	66%

<表3 自分の性格の特徴(「そう思う」+「ややそう思う」の合計)>

校種別	性別	人とつきあうのが得意だ	自信を持ってやれることが多い	どんなことにも積極的だ
小学生	男子	65%	54%	48%
	女子	59%	44%	38%
中学生	男子	65%	53%	49%
	女子	60%	41%	41%
高校生	男子	60%	40%	39%
	女子	54%	30%	35%

表2から見出すことができる傾向は、小学生から高校生にいたるまで、自分の「性格」・「外見」・「成績」に対して、満足している者が「極めて」少ないということである。その中でもとくに、女子児童・生徒の自己肯定感・自尊感情が低いことに驚かされる。

先に、なぜ自己肯定感が問題かといえ、自己肯定的であればあるほど、生きること全般に対して積極的である傾向がみられるからである、と述べたが、次の表3は、それを立証する数字とみていいであろう。青森県の児童・生徒の多くは、「自信を持ってやれること」があまりなく、「どんなことに対しても消極的」である。だから「人とつきあう」こともあまり得意ではない。そんな風に自分を評価しているのである。

もう一度、表2に戻ってみよう。この表は、自分に対する満足度と他者（友達、家族、先生）に対する満足度を比較することができるものでもある。「先生」に対する満足度が友達や家族よりも低いけれども、それでも自分に対する厳しさにくらべれば他者に対しては「満足」し、好意的なまなざしを向けていることは明白である。

人間関係には次の4パターンがあるといわれる。①私はOK、あなたもOK＝対等な人間関係。②私はOK、あなたはダメ＝尊大な人間関係。③私はダメ、あなたはOK＝卑屈な人間関係。④私はダメ、あなたもダメ＝人間関係の不成立である。青森県の青少年の多くが、その中でもとくに女子児童・生徒は「③私はダメ、あなたはOK＝卑屈な人間関係」が支配的である。ちょっと言い過ぎであろうか。

さらに下表の表4の「自分を大切にしているか」という質問の結果を見てみよう。上記のデータが自分の性格等、個別的な側面についての評価（満足あるいは不満足）を示したものであるのに対して、「自分を大切にしているか」という質問は、いろいろ不満な面はあるけれど、全体としては自分を肯定し、大切にしているということを意味している。

次に「他人を大切にしているか」という質問の結果を見てみよう。ほとんどの児童・生徒が「他人を大切にしている」と答えている。しかも、「自分を大切にしている」以上に「他人を大切にしている」。できるならば、「自分を大切にしている」割合がもう少し増えて、「他人を大切にしている」割合と同じくらいになればいいと思う。

<表4 「自分」や「他人」を大切にしているか>

(「している」+「どちらかといえばしている」の合計)

校種別	性別	「自分」を大切にしている	「他人」を大切にしている
小学生	男子	92%	95%
	女子	87%	98%
中学生	男子	88%	95%
	女子	79%	95%
高校生	男子	78%	91%
	女子	74%	92%

最後に、表5の児童・生徒の「悩みごと」を見てみよう。

<表5 「悩みごと」上位5項目>

校種別	性別	1位	2位	3位	4位	5位
小学生	男子	将来	勉強	部活	小遣	進学
	女子	勉強	将来	友人	容姿	小遣
中学生	男子	勉強	進学	将来	就職	部活
	女子	勉強	進学	将来	容姿	部活
高校生	男子	勉強	将来	進学	部活	就職
	女子	将来	勉強	容姿	進学	友人

小学生も中学生もそして高校生も、学校を主要な生活舞台としているがゆえに、主たる悩みは、勉強（成績）や進学、部活や就職等、学校に関連したことである。その中であって、小学生の頃からすでに「将来」のことが悩みの筆頭に上がっていることをどう評価したらいいのであろうか。こんなに早くから、就職でも進学でもなく、さらにもっと先の漠然とした自分の将来のことについて悩まなければならないほどに、子どもたちにとって未来は厳しく映っているのであろうか。

また女子児童・生徒の場合、「友人」と「容姿」が胸を痛める重要な要素であるらしい。注目しておきたい問題である。

## Ⅱ 学校について

かつての非行は、そのほとんどが学校の外で発生した。だから、校外指導がもっぱらであった。しかしながらいつの頃からか、「学校周辺での非行」が指摘されるようになった。そして今日では、子どもたちの問題行動は、もっぱら「学校の中」と「家庭の中」で見られるようになっていく。子どもたちの社会的生活圏が「学校と家庭に集中」している結果であろう。

<表6 学校生活は「楽しい」か>

（「楽しい」＋「どちらかといえば楽しい」の合計）

校種別	性別	H18年		H20年		H22年		H24年	
小学生	男子	89	90%	85	88%	92	94%	88	90%
	女子	90		91		95		92	
中学生	男子	80	84%	87	85%	87	87%	92	90%
	女子	88		83		86		87	
高校生	男子	80	78%	77	79%	84	83%	83	82%
	女子	76		80		81		81	

そんな中であって、学校生活は「楽しい」という児童・生徒が現状維持もしくは少しずつではあるが増えている。「楽しい」理由については、「好きな友だちがいるから」・「クラブ活動や部活動が楽しいから」・「学校行事が楽しいから」が上位の理由である。それは学年や男女の別に関係なく、すべての児童・生徒に共通した理由である。児童・生徒にとって「勉強が仕事」であるとするならば、仕事以外に楽しみを見出そうとするのは大人と同じなのかもしれない。

また「学校が楽しくない」理由も、小・中・高校生のすべてに共通していて、「授業が楽しくないから」・「嫌いな先生がいるから」・「嫌いな友達がいるから」であった。大人の世界から類推するならば、「授業＝仕事」、「先生＝上司」、「友達＝同僚」である。この3要素が、学校をいっそう楽しいものにする決め手なのかもしれない。

その先生について、児童・生徒の73%が「満足している」という（表2）。また、「よいところはほめ、悪いところはしかる」・「大切なことは何かを気づかせてくれる」・「基本的なマナーをわきまえている」といった肯定的評価が上位を占めている（問9の（3）を参照）。いろいろと問題を指摘される昨今の教師たちであるが、自信を持ってもいいのではなかろうか。

### Ⅲ 家族について

およそ86%の児童・生徒が「家族」に満足している（表2）。また、母親と父親についても、「よいところはほめ、悪いところはしかる」・「あたたかく見守ってくれる」・「基本的なマナーをわきまえている」といった肯定的評価が上位を占めている（問9の（3）を参照）。

家族の中で命を傷つけ合うような悲惨な事件が相次いでいる昨今であるが、比較的安定した家族関係が維持されているといえるのではなかろうか。

### Ⅳ 友達について

「人とつきあうのが得意でない」児童・生徒が40%もいる（表3）。そして女子児童・生徒の場合には、友達関係に悩んでいるものも多い（表5）。にもかかわらず81%の児童・生徒が、今の友達関係に満足しているという。自分よりも「他人を大切にしている」など、血のにじむような努力の結果に違いない（表4）。彼らにとって「友達」は、何にも代え難い大切なものだからである。

## V 将来について

表5の「悩みごと」の結果一覧に見られるように、「勉強」「進学」「就職」等、学校で学び、これから社会に出でていこうとしているものたちに固有の悩みが上位に位置づいている。しかし、「将来」という漠然とした未来について、多くのものが悩んでいる実態をどう理解したらいいであろうか。上記においても指摘したことではあるが、とくに、小学生にその傾向が顕著である。日本や世界の現状と未来を彼らなりに見通しているのかもしれない。あるいは親たちの不安感を感じ取ってのことであるのかもしれない。極めて示唆的な事柄である。

## VI 社会について

男女共同参画社会としての社会、地域としての社会、規範としての社会という3側面から、社会についての意識を見てみよう

### 1. 男女共同参画社会としての社会

性別役割分業について、表7は、女性の役割といわれてきた家事・育児分野への男性の参加の是非を、表8は、男性の役割といわれてきた職業・職場分野への女性の参加の是非を尋ねたものである。

<表7 男性も女性と同様に家事や育児や介護をするのは当然だ（「そう思う」）>

校種別	性別	H18年		H20年		H22年		H24年	
中学生	男子	59	62%	72	74%	75	73%	71	74%
	女子	65		76		71		76	
高校生	男子	68	73%	82	78%	77	78%	82	82%
	女子	78		74		78		81	

男性の家事・育児への参加を肯定する傾向は徐々に高まっている。しかし遅々たるものであり、加えて、女子よりも男子の方に積極性が見られるようにも思われる。

<表8 女性はもっと管理職などの決定権のある立場に就くべきだ（「そう思う」）>

校種別	性別	H18年		H20年		H22年		H24年	
中学生	男子	32	40%	38	44%	36	40%	34	42%
	女子	48		49		43		49	
高校生	男子	53	61%	54	60%	46	58%	48	59%
	女子	68		64		70		70	



女性が職業・職場に男性と対等な形で進出することに対しては、男子生徒と女子生徒との間に明らかな意見の違いが見られる。家事・育児の分担については比較的寛大であった男子が、職業・職場における男女平等については、かたくななほどに拒否している様子をうかがうことができる。

次世代の担い手である中・高校生の意識にあつては、男女共同参画社会はまだ遠い世界である。

## 2. 地域としての社会

10年前に比べれば、中・高校生の地域活動への参加がすすんでいる。とくに高校生の参加の伸びは著しい。近年テレビや新聞で高校生の地域活動の報道を見聞することが多くなったが、それに呼応した数字である。

ところで、今、地域社会の人口構成は急速に高齢化している。町内会活動の担い手も高齢化している。いったん災害が起こっても、活動的な人材を十分に確保することができなくなっている。これからは、中・高校生も地域社会人として、地域を担っていく必要性が高まっていくのではなかろうか。併せて、中・高校生の親たちにもそれを期待したい。

<表9 地域の活動に「全く参加したことがない」生徒の割合>

校種別	性別	H14年		H24年	
		人数	割合	人数	割合
中学生	男子	40	36%	27	26%
	女子	32		25	
高校生	男子	53	50%	32	27%
	女子	46		21	

## 3. 規範としての社会

表10は、そういう行為をしても、それは悪いことではない、いやたいしたことはない。そう思っている児童・生徒の割合を一覧表にしたものである。

<表10 社会規範意識（「悪いことではない」＋「やや悪いことだ」の合計）>

項目	校種別	小学生		中学生		高校生	
	年度	H22年	H24年	H22年	H24年	H22年	H24年
いつも遅刻するのは		37%	26%	40%	32%	49%	45%
友だちとの約束を破るのは		22%	22%	25%	27%	23%	21%
自転車の二人乗りは		22%	17%	46%	35%	67%	54%
気に入らない相手を無視するのは		25%	18%	40%	29%	46%	37%

気に入らない人の悪口をインターネットなどに書き込むのは	6%	5%	15%	15%	15%	16%
自分のプロフや写真を直接会ったことのない相手と交換するのは	23%	16%	44%	41%	60%	53%
親や先生に暴力をふるうのは	6%	5%	15%	12%	15%	11%
ピアスや入れ墨をするのは	23%	17%	31%	24%	57%	44%
髪を染めたり、化粧をして学校に行くのは	23%	14%	39%	25%	69%	62%
お酒を飲んだりたばこを吸うのは	5%	25%	19%	18%	40%	31%
覚醒剤等の薬物を使用するのは	1%	1%	3%	3%	4%	3%
万引きをするのは	1%	1%	4%	3%	6%	3%
いじめをするのは	5%	5%	11%	6%	10%	3%

前回調査に比べれば、全体として、やっていいことと悪いことの判断が明確になってきている。しかしながら、「遅刻」の問題にしる、「自転車の二人乗り」の問題にしる、半数近くがあるいは半数以上の者が許容するような意識傾向にある点を見逃してはならないであろう。

どうして、「学校にいつも遅刻すること」がたいして悪いことではないのだろうか。その説明の内容を知りたいと思う。どうして「自転車の二人乗り」が許される行為だというのだろうか。どういうものの考え方をしてその行為を合理化しているのだろうか。それを知ってみたいと思う。

社会規範というものは、学校で教えるとか、家庭で教え込むとかいうものではない。知識として教えるものではない。社会規範とはその地域社会での生活の営みが、自然に血となり肉となって行為に現れてくるものである。だから地域社会も大人たちも、みんなと一緒に考えていくべき問題であろう。

## おわりに

最後に、全体を通してとくに印象に残ったことに言及して稿を閉じたいと思う。

謙虚さを尊び、恥の文化と称される日本人的性格傾向であって、青森県の児童・生徒に固有の傾向ではないのかもしれないが、自己肯定感（自尊意識）が極めて低いことが印象的であった。そしてとくに女子児童・生徒のそれが、極めて低いことである。その結果、彼女たちの社会活動は様々な面において消極的傾向が目立っている。少子化の中にあって、青森県のそして日本の未来を確かなものにしていく力は、男も女も元気になることにかかっている。女子児童・生徒諸君！一つの物差しだけでなく、いろんな物差しで自分を見つめる努力をしよう！そして自信を持って、社会に出て行こう！